

死の支配者と英雄の王の邂逅

霞梳卯狩

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ユグドラシルサービス終了時に異世界に転移してしまったギルガメッシュのなりきりとNPC岸波白野の今後の行方は!?

*あくまでなりきりなのでそれらしくない部分もあります
そういったことが受け付けない人はバック推奨です

*すみませんちよつともやつとするので書き直します

目次

異世界転移	1
支配者と王	8
カルネ村	12
戦力調査	17
王の動向	22
王の中の王	25
戦闘	29
目的	34
愉悦の始まり	39
欲望	42
ラッキースケベ?	45
ここに来て	48
漆黒の戦士と愉快的仲間たち	50
漆黒の剣	54
四人の冒険者	58
旅路1	66

異世界転移

長いようで短かった

そんな時間が今終ろうとしている

DMMORPG ユグドラシル

12年と数か月のクローズドやオープンテスト期間も含めて遊
びつくして金を注ぎ込んだこのゲームが今終る

少ないフレンドや多くのギルドメンバーはすでに引退しここに
いるのは自分と隣に立つNPCだけ

今振り返っても有意義な金の使い方をしたと思っている

幸いなことに両親も自分もお金を稼ぐことは得意だったようでそ
れなりの高水準な給料を生活費以外はすべて注ぎ込んでいたとい
いつても過言ではない

それでも自分の姿や隣にいるNPCを見るとそう思う

Fate

2000年代初期に流行したゲームや小説を掘り出しプレイし
もつとも気に入ったキャラクターガメツシュ

そんな彼になりきれると喜んでクローズドから始めたこのゲーム

そんな彼の姿の中でももつとも惚れたのがFate EXTRA
CCCでの彼だ

主人公を気まぐれで助けてその姿を見て楽しんでいたかと思えば
真剣に主人公と肩を並べて共に進む

あの数々の名言に心を打たれ彼のようにになりたいと思った
だからユグドラシルでもそうした

財を集めギルドを組み国を支配しワールドの一つを支配する王に
なった

ワールドキング

その称号を得て運営からの報酬で望んだものは一つだった

「天地開闢以前、星があらゆる生命の存在を許さなかった原初の姿、地
獄そのものを再現する剣、乖離剣エアがほしい」

そんな無茶な要求に運営が出した回答は快諾だった

そんな運営から送られたワールドアイテム「原初の剣（乖離剣エア）」は我専用のワールドアイテムだった

それとは別に王の財宝（ゲートオブバビロン）も送ってくれたのだから運営には感謝の言葉しかない

どちらの性能も原作通りワールド一つを支配するには過剰なほどのものだった

そんなアイテムを持ち、ワールドを支配した自分にはほかにするところがなくなってしまった

王の財宝はワールド内で作られるギルド武器を除くすべてのアイテムが貯蔵されていく、それが神器級であろうとすべてを貯蔵していった

あくまでオリジナルがコピーされて貯蔵されているだけなので原作者の方に近い気がするが回復薬などの道具や乗り物までも貯蔵できるのもそこは黙っておくことにする

そんな暇な自分の為に作った個人用NPCがCCCの主人公、岸波白野だ

レベルは100だが防御や補助メインで攻撃はあまりできない構成で作ったのでCCCのラストあたりくらいにはなるんじゃないだろうか

この諦めないことしかできない主人公がいると思えば一人にいるのも寂しくはなかった

そんな玉座の間で終わりを待つ日々が今日終わる

ギルドランキングでは結局5位で終わってしまったって不本意以外の何物でもないがこればかりはもうどうしようもない

何度目かのため息をつきながら玉座から立ち上がり横で座っている岸波白野を見る

このNPCともお別れだ、データは保存してあるのでほかに似たようなゲームができればそこでまた作ることもできるだろうがそれは少し悲しい気がする

「立て、つごういさ」

NPCコマンドで岸波白野を付き従いさせる

最後までらい外の世界を見ながら終わるのを待つのもいいかもしれ
ないと玉座の間のテラスへと向かい移動アイテムヴィマーナを取り
出す

「乗れ」

岸波を先に乗せ自分も乗り席に座る

ヴィマーナを動かし上昇し移動を開始する

最後まで待ったんだ、最後までらい自由に動き回っても誰も文句は言
うまい

サーバードاونまであと30秒

せめて景色を目に焼き付けようとギルドホームを空から見る

あと20秒

都市と言えるほどのギルドホーム、輝かしき栄光の残骸

あと10秒

もう満足だと思いいルドを離れ真っ直ぐに速く、速く、飛ぶ

あと5秒

「やっぱだ…」

0秒

その瞬間

光が消えた

視界が開けた先は先ほどと変わらない景色だが絶対にありえない
ことが起こっていた

視界からUIが消えていたのだ

「なにが…」

何が起こっていると言おうとするもそれは横からの声に遮られた

「おい！おいギル！ギルガメッシュ！一体どこまで行くつもりだ！

さつき何かに飲み込まれたぞ！おい！おいって！」

横にいたNPCであるはずの岸波白野がこちらを向いてしゃべっ

ていたのだ

「あ、ありえない…」

「何がだ!?何がありえないんだ!?またか!?また慢心したのか?」

「ええい!落ち着け!落ち着かんか!」

「王様が落ち着きすぎなんだ!さっきの黒いナニカは何だ!?」

さっきの目の前が真っ暗になる感覚はログアウトの感覚ではなかったのか

どうして、何が起こっているのか

考えることはいくらでもあるが考えられるのはユグドラシル2へと移行したのかサーバーダウンが延期されたのか

だがそれならNPCがしゃべるのはありえない、声の設定なんてできない以上はしゃべろうとしても声がつくはずがない

「いいから一度これを止めてくれ!何が起こっているか確認させてくれ!」

たしかにとヴィマーナの移動を止める

「おい、こつちによれ」

以前流行した異世界転移物のゲームやライトノベルの可能性、それを知るべく、ゲームでは絶対にできなかったことをここで試す

「なんだ、あともうちよつと下に下げてくれ、こんなに高いんじや下が細かく見え…」

ズキユウウウウウンという効果音でもつきそうな勢いでギルガメッシュと岸波白野はキスをした

「なっ!?ばっ!?な、なんなんだ!AUO!またなにかの冗談か!」

ゲームの世界ならこんなことをすれば即BANなのに何かが起こることはない

つまり、ここはゲームではない

「おい!せめてなんか言え!言つてください!、ああもう、なんか悲しくなってきた」

ここは異世界で現実だということだ

「フフ、フハハハハハハハハハハ!よい!そう喚く雑種、嬉しさのあまり泣くのはいいが嬉ションはするなよ?我が財が汚れる」

「するわけないだろう！そこまで墜ちた覚えはない！全く、それでここはどこなんだ」

「わからぬか？」

「ホームからかなり離れているにしてはこんな地形見たことない」

「そうだ、ここは異世界だ」

「は、はあああああああ!?!」

「ハハハハハッ！よい！よいぞ！いいリアクションだ雑種」

「全く、なにかするならちゃんと言えてくれ！あとそろそろ下へ降りしてくれ、周りの確認ができない」

「降りた先は地獄かもしれないぞ？」

「こんな平らな草原地帯に地獄なんてあつてたまるか、それにあつたとしてもギルなら何とでもできるだろう」

「無論だ、我を誰だと思っている」

「はいはい、最強無敵のAUO様ですよ」

「引つかかるがまあよい」

NPCと会話する、それだけだったが今自分は心躍るほどに興奮していた、あの夢にまで見た岸波白野との会話、ぶっちゃけ超美少女だし何より声がいい

あと初キスがNPCなのは経験とカウントされるんだろうか

心ではソーラン節でも踊りそうになりながら平静を装い下へと降りていく

「なあ、あれってナザリック地下大墳墓じゃないか？」

「なに？」

言われた方向を見るとそこには確かにナザリック地下大墳墓の表層、入り口が見えていた

「あとなんかこつち見てるおじいさんがいる、すつごいナイスな老執事っばい！」

確かに少し離れた位置に燕尾服を着た老人がこちらを見ている

「不用心に近づくなよ雑種、あれが味方とは限らん」

「でもなにか知ってるかも」

岸波の言う通りではあるが老執事の位置からしてあれはナザリツクから出てきたものだろう

ならばこちらに危害を加えてきても不思議はない

いつでも岸波を守れるように王の財宝展開の準備だけはしておく
「もし、そこのお二方はこのあたりの住人でいらつしやいますでしょうか」

警戒してところ呼びかけられる

「ほら、多分大丈夫だって、違います、私たちここに轉移させられてしまったみたいなんだ」

「これは失礼を、私はナザリツク地下大墳墓の執事をしています、セバスと申します」

「私は岸波白野、こっちはギルガメッシュ」

「ふん、貴様がここにいるということは周辺の偵察と情報把握の為に？」

「はい、我が主の命により偵察と情報収集を行っていました」

「ならばその主とやらに伝えろ、英雄王がいるとな」

「了承いたしました」

『なに!?ギルガメッシュだと!?それは確かか』

『はい、自らを英雄王と名乗り隣には岸波白野という人間の少女を連れていきます』

『彼らから敵対行動はされていないか?』

『はい、ギルガメッシュ様はこちらを警戒しているようですがあくまで岸波様を害されない様になっている程度でこちらに敵意があるようには見えません』

『わかった、して、彼らは轉移させられたと言ったのだな』

『はい、恐らくは我々と同じような状況かと』

『わかった、あとはこちらで話そう、二人を第6階層まで案内してく

れ』

『よろしいのですか？』

『もし敵対した場合は非常に厄介だが第6階層には守護者たちが全員揃っている、いざとなれば勝てないはずだ』

『わかりました』

「主よりお二人をお連れせよと伝言が入りました、どうぞこちらへ」

「わかった」

「入った先で総戦力が待っているなんてことがないといいがな」
「ッ！」

「なに、AUOジョークだ、笑うがいいフハハハハハハ」

「すまない、放っておいて先に進んでくれ」

「おい！雑種！貴様、王をなんだと思っている」

「王の中の王ギルガメツシユ様ですよ」

「なんだわかっておるではないか」

「そんな彼らのやり取りを背にセバスは第6階層へと彼らを案内するのであった」

支配者と王

予想はしていたが案内された先にはアインズウールゴウンのギルドマスターと動画で見た階層守護者のシャルティア、コキュートス、デミウルゴス、アウラ、マーレ、それと見たことのない美女がそこにいた

「ようこそ、我がナザリック地下大墳墓へ、私が主のモモンガです」

「お招き頂き感謝する、聞いているだろうが私が岸波白野だ、そしてこつちがギルガメッシュだ」

「王であるこの我を迎え入れるのにこんな場所とはな」

『(あなたがモモンガさんですか)』

「すまない、こちらもここへ転移させられ急ぎ確認せねばならぬことがあったので」

『(そうです、そういうあなたはワールドキングのギルガメッシュさんじゃないですか、あなたも転移させられたんですか?)』

「ならば仕方あるまい」

「あなた、一体誰に向かってそんな口を！」

「よい、よいのだ、アルベドよ」

「出過ぎた真似、申し訳ありません」

「なるほど、よい部下たちではないか、客人に対し殺意を隠さぬとはよい対応だ」

「ギル！煽るようなこと言わないで！」

『(モモンガさん、できれば二人で話したいんですけどできますか？あと変に煽っちゃってすみません)』

「お前たちも、よさぬか、私の顔に泥を塗るつもりか？」

「「そんな！滅相ありません」

「よい、主を守るは臣下の役目、よいぞ、その忠道、我が雑種にも見習わせたいところだ」

「悪いが私にはこれが精いっぱいだ」

「わかっておる」

「ギルガメッシュ殿と岸波殿もこちらへと転移させられたと聞いたが

「どういふ状況でしたか」

「王様の移動アイテムで移動していたら黒いナニカに飲み込まれて視界が明けたらここだった」

「大方そちらも同じであろう、ふとした違和感に気づいた時には転移済み、誰がやったは知らぬがな」

「なるほど、では階層守護者たちよ、自らの仕事へ戻れ、ギルガメツシユ殿は私についてきてくださいますか」

「構わぬ、それとこの雑種を風呂と食い物をやってくれ、先ほどから腹の虫が聞こえて仕方なくてな」

「それはギルがリングオブサステナンスをくれないからでしょ!」

「よいか? 食とは愉悦の一つだ、貴様には愉悦が足りぬ、ここならばそれも完備であろう、この主が許すのならばな」

「構わんよ、セバス、任せる」

「畏まりました、では岸波様、こちらへ」

「ああ、ギル! 気を付けて、それと問題を起こすなよ?」

「誰に向かって言っておるか!」

セバスに案内されついでいく岸波を見送り自分はモモンガへとついでいく

『さて、これで二人で話ができますね』

『そうですね、それでギルガメツシユさんは本当にこの転移に関して何も知らないんですね?』

『そうなんですよ、サーバーダウンだからって自棄に飛ばしてたらこの様です』

『ギルドにはいなかったんですか?、A U Oは出歩かないって掲示板のネタにされてましたけど』

『そのつもりだったんですけどね、最後ぐらい自分の世界を見ておこうと思つて』

『わかります、最後の時間は悲しいような悔しいようななんかそんな感じでした』

『そうですね、それでモモンガさんはこれからどうされるんですか?』
『ナザリック地下大墳墓は目立ちすぎるので丘をいくつか作つて隠し

ます、あとは周囲を探ってみて、ですかね』

『りよーかいです、何かあれば呼んでください、あと私は半神半人で岸波は人間なんですけど、大丈夫ですか？確かここは異形種オンリーだったはずですけど』

『本来ならそうなんですけど、せつかく仲良くできそうなギルガメツシユさんを追い出したりなんてできませんよ、最初は敵対するかもつて怖かったですけど』

『いえいえ、こちらこそありがたいです、私たちは二人だけですし仲間がいるのは助かります、それに怖かったのはこっちですからね、総戦力が待っているなんて予想したら本当に総戦力が待ってるんですけど』

『ははは、すみません、それじゃあ私は少し周りを見てきますので』
『はい、いてらです』

「ユリ・アルファよ、ギルガメツシユ殿を空いている部屋へお連れしろ」

「はい、ではギルガメツシユ様、こちらへ」

「ではな、モモンガよ」

ユリ・アルファと呼ばれたメイドはチョーカーを付けた超美人だった
た

というよりこのダンジョンにいる女性人全員美人過ぎませんか
ねえ

いやあうちの岸波も美少女だしイケメンボイスなんだけどなんて
いうかたくさんいると目移りしても仕方ないよね？

と中の人が盛大に身悶えているのを感じ取ってか否か食堂で激辛
麻婆豆腐を堪能していた岸波白野は顔を上げた

あと周囲の人物は周囲に漂う刺激臭により少し距離を取り興味本
位でひと舐めした一般メイドが倒れたのは余談だろう

ユリ・アルファに案内されたにはおそらく以前のギルドメンバーが
使っていた部屋だろう

部屋に入るとユリはお辞儀をして去っていき別のメイドが世話役
にと入ってきた

「モモンガ様より命じられギルガメッシュ様の御世話をさせていただきます、どうぞよろしくお願いします」

「よい、我はモモンガが戻るまで眠る、用があれば呼ぶ、下がっていてよい」

「畏まりました」

そうして転移初日は衣食住完備の味方になることができた

カルネ村

異世界に転移してから数日経ちそろそろ暇を感じてきたときにモモンガから伝言が飛んでくる

『ギルガメツシユさん、少しいいですか？』

『はい、構いませんよ』

『リモートビューイングで周りを見ていたら襲われている村を見つけたので助けようと思うんですがギルガメツシユさんはどうしますか？』

『わかりました、私も岸波連れていきます』

『了解です、セバスに迎えに行くように伝えるので私の部屋のゲートから来てください』

『了解です』

とモモンガさんからのメッセージのやり取りを終了した直後にセバスの到着

「ギルガメツシユ様、お迎えに上がりました」

「よい、入れ」

入室許可を出したところでセバスがわずかに固まる

当然だろう

自分は全裸で股間を光らせベッドでは今だ岸波が寝ているのだから

「どうした？」

「いえ、失礼しました、モモンガ様からお二方を自室にあるゲートへと案内せよと仰せつかりました故」

「そうか、ではすぐに行こう、おい雑種！いつまで寝ておるか！」

「仕方ないだろう、寝るのが遅かったんだ、それにこんなフカフカなベッドで熟睡しない方がおかしい」

「我はこれからモモンガが助けに出た村に行く、お前もついてこい」

「わかった、少し待ってくれ」

「しよのない奴よ」

と岸波の寝起きの身支度を待ち自分はいつもの鎧を身に纏う

「相変わらずその一瞬で着替えられるのは羨ましいな」

身支度を終えた岸波が隣に並ぶ

「では案内するがいい」

「どうぞ、こちらです」

モモンガの自室にあるゲートを抜けるとそこにはマジックシールド

ドの中で震える少女が二人いた

「おい、貴様ら、ここにいかつい顔をした怖い骸骨を見なかったか？」

「おいA U O、恩人になって言い草だ」

「え、あ、はい！」

「そうか、よい返事だ、あとで飴をやろう」

「やっぱりギルは子供には甘いんだな」

「飴と甘いを掛けているのか雑種？いいセンスだ笑ってやろうフハハハハハハ！」

「どこが掛かっているんだ…まあいい、それでその骸骨は向こうへ？」

「はい、私たちの村を助けてくれるって」

「なるほど、わかった」

二人はシールドに守られているし見るにゴブリン將軍の角笛もある

大丈夫だと判断し村へと向かった

そこでは丁度モモンガが村を襲っていた兵士を逃がすところだった

モモンガの方に近づいていき後ろから話しかける

「なるほど、わざと逃がして元を釣り上げるか、だがここで釣り上げねば餌を持って逃げられるぞ、モモンガよ」

「あなた！昨日から失礼よ！アインズ様に助けられた身でよくも！」

「よい、アルベドよ、彼らは協力者であり彼は私と同じ存在なのだ、言及は許さぬ」

『すみません、ギルガメッシュユさん、すこし思うところがあつてこれから自分はアインズ・ウール・ゴウンを名乗ります』

『なるほど、ギルドの知名度を利用したプレイヤーの誘い出しですね？』

『え、そこまでわかるんですか?』

『いや、なんとかなですが』

『なんとなく…』

『き、気にしないでください、それで嫉妬マスクとガントレットは怖がられ対策ですか?』

『それも…わかります?』

『ゲートの前の姉妹を見ればわかりますとも…その、なんていうか頑張ってください』

『は、ははは』

『うちのA U Oが毎度すまない』

『いえ、アインズ様が仰られるなら私たちはそれに従うまで、あなたが気にすることではないわ』

『来てもらってすぐで悪いがあ姉妹を迎えに行つて来てもらえないか、その間に私が話をつけておこう』

『わかった』

『いいだろう』

そうしてギルガメッシュと岸波白野は姉妹を迎えに行きモモンガは村長から情報を聞き出しにはいった

『そら、餡だ、ありがたくもらうがいい』

『ありがとう!金ぴかなお兄ちゃん!』

『そうかそうか!金ぴかか!よいではないか!雑種よ!お前もこれくらい…いや、やめよ、悲しくなる』

『なんだよ!言うなら最後まで言えよ!途中で生暖かい視線を送ってくるな!』

『あの、あなたたちはアインズ様のお仲間なんですか?』

『一応そうだ』

『でもあなたたちはあんまり怖くないですね』

『そう言つてやるな、あの骸骨はあれでもセンチメンタルでな、お前たちに怖がられたとマスクをしていたぞ』

『と、とんだご無礼をいたしました!』

『気にするな、あれはあやつが察せぬのが悪い、そら村だ、家族や友人

の弔いをしてやるがいい」

「はい、ありがとうございます」

歩いている最中に飴を与え話をしてやったがやはりまだ少女、両親が死んだ現実重いようだ

「ギル、なんとかできないのか?」

「できる、だがそれをすればそれ相応の見返りを要求せねばならぬ、いまの奴らに、それができると思うか?」

「う…それもそうだが」

「それに単純に蘇生をしても奴らがそれに耐えられるかどうかもわからぬ以上は…」

「ギル?」

「ふん、この村は何かに呪われでもしたのか?」

「え?」

「アインズよ、この村に向かってくる者たちがいる」

「それって新手?」

「さあな、だがあの隊列や顔からすればそれなりの戦士だろうよ」

「村長は私と一緒に村の入り口で対応を、ギルガメツシュ殿は村人たちを守っていただけですか?」

「わかりました」

「わかった、ギル、いくよ」

「ふん」

村の倉庫に集められた村人は怯え震えていた

あれだけのことがあったのだから仕方のないことだろうと思うが自分の中ではその程度で生きることが諦める者に価値があるとは思えなくなっていた

「ギル、多分囲まれる、さつき逃がした奴らの元の狙いはこの村に向かっていた人たちだ、多分恨みを買って消されそうになっている」

「ほう、それでお前はどうする」

「この村を守る」

「守る、か、貴様にそれができるのか、雑種」

「できない、だから、力を貸してくれ、英雄王」

「フフ、フハハハハハハハハ!!、守ると言っておいて他人便りとは本
当に貴様はいい度胸をしている、いいだろう、この我の力、存分に使
うがいい」

『モモンガさん、この村は恐らく囲まれます、さつき来た集団が狙いで
しょう』

『なるほど、彼らも釣りをしていたわけですね』

『釣られた魚が自分だとは思っていない様ですけどね』

『で、どうしますか?』

『うちのが守りたいというので守ります、とはいっても攻めの守りで
すが』

『ちよつと待ってください、さつき来た人ガゼフ・ストロノーフってい
う王国の戦士長らしいんですよ、それで共戦に誘われたんですが様子
見したいですし彼らに任せようかと』

『なら、彼らが全滅する直前に入れ替わりましょう、彼らの武装と数
じゃ勝てないはずですよ』

『なるほど、いい演出ですね』

『先ほどの集団、どうやら王国の者のようだぞ』

『なら、協力して』

『そう急くな、アインズからのメッセージでは奴らが何とかするから
我らは村を守れだそうだ』

『そうか、ならいいんだが』

『なに、主役は遅れて登場するものであろう、ならば今はその時を待つ
がいい』

『ギル、悪い顔してる』

戦力調査

『アインズさん、彼らの様子はどうですか?』

『相手が天使を召喚していませんか? 苦戦しているようです』

『それで今後の予定は?』

『戦士長ガゼフ・ストロノーフが敗北する寸前で私とアルベドが出ます、ギルガメッシュさんは』

『できれば私も自分の戦力を知りたいので行ってもいいですか?』

『はい、構いませんよ、なら岸波さんは残していきますか?』

『いえ、岸波の能力も試したいので一緒に連れて行きます』

『人間を殺すことになるんですよ?』

『大丈夫です、人間対人間は、慣れてますから』

『なら、構いません、でも、見せ場は譲って下さいよ』

『りよーかいです』

『雑種、貴様の予想は当たったようだぞ』

『やはり彼らは負けたのか?』

『いや、まだ負けてはおらぬ』

『なら、助けに行く』

『まこと、貴様のお人好しも底抜けよな、だが相手は人間だぞ?』

『それはわかっている、でも自分が生きて、この村を守って前に進むのにそうしなければいけないのなら、私はそれを受け止める』

『よい顔だ、さあ、我に見せるがいい、貴様の生き様を』

言うが早いかな岸波は駆け出してしまった

『おい、今から駆けたとて間に合わぬ、アインズの転移に便乗するぞ』

『それを先に言え!』

『では便乗いいですか?』

『はい、ばっちり、いけますよ』

アインズがガゼフと入れ替わるのに便乗して敵の目の前へと転移する

『はじめまして、スレイン王国の皆さん。私の名前はアインズ・ウール・ゴウン。アインズと親しみを込めて呼んでいただければ幸いです』

す」

そう言いスレイン法国へと質問を始めるアインズ、それに対して苛立ちを隠さずに問いかけるニグンという男

「……命乞いでもする気か？ 私たちに無駄な時間をかけさせないというのであれば、考えよう」

「いえいえ、違いますとも。……実は……お前と戦士長の会話を聞いていたのだが本当にいい度胸をしている」

その言葉と共にアインズの口調と雰囲気が変わる

「お前たちはこのアインズ・ウル・ゴウンが手間をかけてまで救った村人たちを殺すと広言していたな。これほど不快なことがあるものか」

その怒気を孕んだ風がニグンたちの間を吹き抜けた

「……ふ、不快とは大きく出たな、魔法詠唱者。で、だからどうした？」
「先ほど取引と言ったが、内容は抵抗すること無く命を差し出せ、そうすれば痛みはない、だ。そしてそれを拒絶するなら愚劣さの対価として、絶望と苦痛、それらの中で死に絶えて行け」

その言葉と威圧にニグンの周りからは怯えの声が漏れ、あまつさえ自分は身体が震えぬように耐えることで必死だった

『ところでモモンガさんそれ練習してました？』

『ちよつとギルガメッシュさん！ ちやちや入れないでください！ 雰囲気！』

『すまない、空気の読めない男ですまない』

『もう、気を付けてくださいよ、それじゃボスっぽいのは以外は譲りません、できれば数人実験と情報収集で使いたいのので残しておいてください』

『了解です』

「天使たちを突撃させよ！ 近寄らせるな！」

ニグンの命令を受けて襲いかかったのは二体の炎の上位天使だ

だがその手に持つ炎の剣がアインズに突き刺さることはなかった

「アインズよ、雑種相手に話が過ぎるぞ、会話とはせめて、己の立ち位

置を理解したものと行うのだ」

天より現れた鎖が天使二体を縛りその動きを止めていたのだ

「我もこの地での力はまだ試しておらん、必要最低限まで間引いても問題はあまるまい」

「……本来なら私の力を見せてからの手筈ですがいいでしょう、英雄王と言われるその力の一遍、見せてもらう」

「フハハハハハハ!! そう期待されては手加減が難しくなるではないか、白野よ、用意はいいな」

「問題ない、こちらを監視する者なし、敵の攻撃では私たちはダメージを受けない、ならいつも通りでいい」

「よい返事だ、アインズとその臣下よ、見るがいい」

自分でも驚くほどの気分の高揚にこれが慢心かと納得するももう止まらない

ギルガメツシユの戦闘は単純だ

王の財宝から取り出した武器を投げつける

金に飽かした最強装備の数々、アーティファクトや遺産級などだけではなく伝説級や神器級までもがそれこそ腐るほどあるのだ

本来ならば担い手がいなければ効果を発しないものでも王の財宝から投げつけられたものは効果を発する

それを制限なしに行えるのだ

これがワールドキングのスキル「王の財宝」《ゲート・オブ・バビロン》だ

「貴様ら程度に二級品を使うのは業腹だが我は今気分がいい」

取り出されたのは彼にしては少ない100の門、そこから伝説級のアイテムが姿を現す

「さあ…とくと味わうがいい!」

その100の門から一斉に武器が放たれる

地面は削れ土が舞い上がる

その土埃が静まるときに立っているものはニグンのみだった

「は、はえっ!」

あまりの出来事にニグンは理解が追い付いていなかったのだ

「な、なんだ今のは!?糞!糞!これを使うことになるとは!」

「ほお、アインズよ、貴様の出番があるようだぞ」

思考を取りも出したニグンは懐からこぶし大の水晶を取り出した
「余裕を保っていられるのはそこまでだ!見るがいい!人類が到達でき
ない力!最高位天使を!」

『モモンガさん、最高位天使って』

『熾天使級でしょうか、もし至高天の熾天使でしたら助力を願います』
『了解です』

「アルベドよ、スキルを使用して私を守れ」

「ギル、ガードして!」

「ふん」

「見よ!最高位天使の尊き姿を!威光の主天使!」

それは光り輝く翼の集合体だ。翼の塊の中から、王権の象徴でもある
笏を持つ手こそ生えているものの、それ以外の足や頭というものは
一切ない。

異様な外見であつてもなお聖なるものだと言言できる、そんな雰囲気
気を有していた

「……………これが、これが本気だというのか?……………これが私たちに對す
る切り札?」

「馬鹿な、ありえん、これが…」

「どうした、先ほどまでの威勢は!だがそれは仕方のないことだ!こ
れこそ!最高位天使の姿だ、本来ならばこのようにすることに使うのは
もつたいない、だが、貴様たちにはこれを使うだけの価値があると判
断した!さあ許しを乞え平伏せよ!」

「くだらん」

「なに?」

「この程度のことには狼狽えアルベドにスキルを使用させるなど」

「この程度に身構えるなど」

「本当にくだらん」

「何故だ!なぜ貴様らは最高位天使を前にそのな態度をとることがで
きる!ありえんありえんありえん!最高位天使に勝てる存在がある

はずがない！魔神にすら勝利した存在を前に！」

「そのどこが最高位なのだ」

「黙れ黙れ黙れ！虚栄など無駄だ！〈善なる極撃〉を撃て！」

それはただの人間やモンスターが相手だったならば、存在を消し去るほどの一撃だったのだろう

神の一撃、そう言われても違和感のない攻撃だった

ただの人間やモンスターが相手だったならば

その光の柱の中で二人は笑っていた

「これが、ダメージを負う感覚、痛み」

「このような感覚は久しぶりだ、だがこれではマッサージにすらならぬのではないか？」

「それはギルガメツシユさんの属性値が中立だからでしょう」

「それもそうだな」

「素晴らしい。これでまたひとつ実験が終わったな」

「有意義な時間になったではないか」

そこでアルベドが激怒した

当然だろう、自分の主が傷つけられたのだ

こっちの従者は飽きたのか少し下がった位置で体育座りをして眠そうな顔をこちらに向けている

「まだだ！もう一度だ！」

「おいおい、今度はこちらの番だろう？〈暗黒孔〉」

もう一度〈善なる極撃〉を放とうとした威光の主天使がアインズの放った小さい球体に吸い込まれ消え去る

その光景に絶望し命乞いをするニグンに対しアインズが発した言葉は

「確か……こうだったかな。無駄な足掻きを止め、そこで大人しく横になれ。せめてもの情けに苦痛なく殺してやる」

その後、アインズの僕たちによりギリギリ生きている兵士と気絶したニグン、そして死体を回収しガゼフには彼らに逃げられたと伝え自分たちはナザリックへと帰還した

王の動向

玉座の間

そこにはガルガンチュアやヴィクティムを除く各階層守護者、そして彼らが厳選したであろうナザリック地下大墳墓内の高位の僕たちが整列していた

ここでモモンガは自らの旗を落とし

「私は名を変えた。これより私の名を呼ぶときは」

そこで区切りある場所を指さす

「私の名を呼ぶときはアインズ・ウール・ゴウン……アインズと呼ぶが良い」

その声に応えるようにNPCたちが、僕たちが万歳と唱和する

そんな玉座の間の隅で英雄王とその従者は様子を見ていた

「王様はなにかないの？」

「我は我だ、そこは揺るがない、奴は個人ではなくギルドとなったそれだけのこと」

「ギルドになる？」

「そうだ、奴は長ではなく支配者となった。ならばそれは最早個人ではない。」

「なるほど」

「ほお、貴様のそのハサンな頭脳でも理解できたか」

「おそろく。」

「まあよい、見てみる、奴が去ったあとにも従者たちが残っている」

その視線の先には階層守護者統括であるアルベドが前に出てその横にはデミウルゴスがいる

「デミウルゴス。アインズ様とお話した際の言葉を皆に」

「畏まりました」

そして紡がれるは夜空への感動と

「最後にこう仰いました『世界征服なんて面白いかもしれないな』と。ほんの冗談だったのだろう

「アインズ様の真意を受け止め、準備を行うことこそ忠義の証であり、優柔な臣下の印。各員、ナザリック地下大墳墓の最終的な目的はアインズ様に宝石箱を。この世界をお渡しすることだと知れ」

だが彼らは真に受けてしまった

「つく、フハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

「ちよっ、ギル!?!」

「ほとほと退屈せんやつ等よ、この世界を、お渡しする!白野よ、貴様もこの者たち程度には我に敬意を払ってはどうか」

「突然何なんだ!ああ!ほら、みんなすごく怒ったような顔でこっち見てるから!」

「良いではないか!その程度、些細なことだ」

「些細って!」

「貴様等!よい、許す。この世界、見事モモンガに、いや、アインズ・ウール・ゴウンに捧げて見せよ!」

あまりの出来事に笑ってしまった

モモンガはただの冗談で言った一言がギルドの目標を決めてしまったのだ、それも本人が知らない間に

これが笑わずにいられるだろうか

いや、不可能だろう、事実を知ったモモンガが慌てる様が目に浮かぶようだ

「人間風情が居候の分際によくそんな口を・・・!」

「化けの皮が?がれておるぞ雑種」

集会に水を指されたのが癪に障ったのだろう

階層守護者達が不快そうにこちらを見ていた

「あなた方はアインズ様の多大なる慈悲で、この場にいることを忘れないほうがいい」

「言うではないか、では番犬である貴様等の客人への暴言は飼い主の躰がなっていないということか」

「ツ!!」

その場にいた全員が殺気立った

「だから王様は多方面に喧嘩を売らないでくれ!」

「そう慌てるな、〈伝言〉アインズよ、貴様の部下のガス抜きだ、場所を貸せ」

唐突にアインズを呼ぶギルガメッシュに周囲は騒然となる

「やれやれ、どうしてそうなったか、は聞くまでもないか・・・」

「あ、アインズ様!!何故このような者を!」

「落ち着け、アルベドよ、お前たちの力を知るのにはいい機会だと思わないのか?」

「ま、まさか・・・!」

「全くもって血の気の多い奴等よ、先の実戦では大した運動にもならなんだからな、貴様もどうだ?」

「是非、とりたいところだがそれでは観戦ができないからな」

「いいだろう」

「場所は六階層の闘技場でいいか?」

「壊れても知らんぞ?」

「そんな柔な造りではないさ」

ハツとしたような表情の守護者達を置いて話を進めていく

内心はしまったと動揺していたがモモンガさんの機転のお陰でなんとか大爆発は逃れられた

守護者達が六階層へ向かって行くのを見ながらモモンガへこっそりと謝ったのは言うまでもなかった

王の中の王

「まさかとは思っていたけれど、これもアインズ様は読まれて」

「そうとしか思えません、あの人間が我々を怒らせアインズ様に伝言を送った直後にアインズ様はいらっしゃった」

「アノ者トアインズ様ガ事前ニシナリオヲ才考エニナラレタトイウノカ」

「ああ、先の村ではこの世界の人間も天使も脆弱だと再確認できただけでした。アインズ様は常に脅威に対して万全を期するように我々に申し付けてくださった、だがそれだけではやはり足りないのだと、自らの目で我々の忠誠を確認したいのではないだろうか」

「アインズ様ノ命デアレバ我ラハ唯実行スルノミ」

「その命を実行できるかを確認したいということよ」

「でもあんな奴使わなくてもいいと思うんだけどな」

「あの者の行動や言動が演技とは思えないが客人の粗相に対する我々の対応を見ていた可能性もある、そうだと先ほどの我々は少々：」

守護者達がそんな意見を交し合っていると知らずに闘技場へ向かうアインズとギルガメッシュは小声で慌てていた

(すみませんモモンガさん、ちよつと噴出してしまったのが勘違いされてしまったみたいでうまく誤魔化せませんでした！)

(仕方ないですよ、でもこれからどうするんですか？彼らはNPCとはいえ1v100なんですよ?)

(正直に言うとうと真面目にやれば勝ってます、ですがモモンガさんたちの子供みたいなものでしょう、だからどうしようかなって)

(.....勝てるんですか?)

(殺すことは簡単です、でも生かしつつ参ったと言わせるのは不可能に近いかと、なにかルールが必要ですね)

(簡単かあ、そう言われると傷つくなあ)

(あくまで予想ですが彼らはNPCなのでプレイヤーのように連携や策の経験がないんです、だから個々に撃破する感じになるならという意味で簡単と言っただけで彼らが連携や策を生かせるようになれば

私相手なら話にならなくなると思いますがよ。」

(ああ、気を使わせてしまつてすみません、えっと、一応ルールについてなんですが俺が生命反応でHP確認して5割程度で敗北判定でどうでしょうか)

(いえいえ、こちらこそ申し訳ない、ルールについてはそれでいいと思います、武器とや鎧が壊れたらこっちで修理アイテム出します)
(そうしてもらえると助かります)

「王様さつきからずっと黙ってるけど機嫌悪いのか?」

「いや、こういう催しも悪くないと思つてな、貴様はどうする?」

「どうするも何も私の居場所は王様の隣だ、ギルが戦うのなら私はその隣に立つ」

「ほう、よい度胸だ、その度胸に免じ、特等席で我の勇姿を見ることを許す」

嬉しい事を言ってくれるというか無駄にかっこいいな、惚れそうだが
そうしているうちに六階層の闘技場に到着する

「審判は私が執り行う、問題はないな」

「いいだろう、心して掛かって来るがいい」

「まずはわからわからでいいでありすんかえ」

「イヤ、ワタシカラダロウ」

「どっちでもいいから早くしてよ!」

この時に守護者達はまだ幼子と変わらなかつたのだ

戦闘は知っていても相手を知り自分がどうすべきか理解していなかつたのだ

自分たちの前に立ち偉そうにするモノが何か知らなかつたのだ
「.....たわけどもめ」

そう呟いただけ

それだけでその場の温度が下がったようだった

「我は心して掛かれと言つた筈だ、何故待たせる」
逆らつてはいけないという本能

本来ならば主人にしか浮かばないであろう本能が相対している相手に働こうとした

誰から行くかと話し始めた守護者に対して放たれたのはワールドキングのパッシブスキル『王の言葉(キングワード)』ワールドクラスを除く全てのレベル関係なく畏怖させるといふ効果を持つスキルだ

畏怖に対する耐性があつたとしても怯ませる程度の効果はある
そのスキルに乗せて放たれた言葉に守護者達は畏怖を抱いてしまったのだ

だがそれを許せるほど守護者達は腐つてはいなかつた

「舐めた真似を・・・!」

「今の言葉を後悔させてやる!!」

「雑種如きが粒で来ようとするでない、全員まとめて来るがいい」

その瞬間ギルガメツシュの後ろの空間が歪む

『王の財宝』

ギルガメツシュの持つスキル支配したワールドの武器、防具、アイテム、乗り物、その全てを内包する蔵

その中に内包された伝説級(レジェンド)の武器の数々が黄金の波紋から顔を見せていた

その数はおよそ30

その全てが守護者達のほうへと向いていた

「なっ!?」

「呆けている暇はないぞ?」

その全てが弾丸のような速度で発射された

最初に反応したのはアルベドだった

「ウォールズ・オブ・ジェリコ!ふんぐうあああああ!!!」

いつもならカウンターアローやミサイルパライで迎撃してがこれは駄目だと察したのか全体防御で対処する

「いつまで持つかな?」

英雄王の手数に追われ防御が手放せなくなってしまった
だがその間に動くものがあつた

「隙アリ！」

「消えろ！」

アルベドが防いでいる間にコキュートスとシャルティアが大技で
止めに入る

「風斬！」

「清浄投擲槍！」

交差するように放たれる攻撃

lv80程度のプレイヤーならばこれで終わりだっただろう

「たわけ」

「!?!」

二人の攻撃は直前で現れた盾により防がれ眼前に現れた波紋から
の武器射出により弾き飛ばされる

「グウ！」

「ぐ！」

コキュートスの外殻が削られシャルティアのドレスが切り裂かれ
る

「マーレ！、アウラー！二人に援護を！」

「は、はい！」「りよーかい！」

〈影縫いの矢〉へトワイン・プラント〉〈石化の視線〉

拘束系のスキルと魔法がギルガメッシュへと向かう

やはりこうでなくては

なんの策も連携も取れないNPCだと侮っていた

所詮はレベルだけの雑魚だと

だが手抜きとはいえ自分を前にこうして抗っている

そのことに喜びを感じてしまう

「よい開幕だ。死に物狂いで耐えろよ雑種——！」

戦闘

3方向から自分へと放たれる拘束系スキル

弾き飛ばされるも体勢を立て直し再び向かってくる2人

防ぐことから受け流しへと変更しこちらへと向かってくる1人

この程度の雑種相手に苦戦なんてできるわけがない

次に取り出すのは「神器級（ゴツズ）」

それを100ほど出現させる

自分の放てる武器や防具の中でも一級品

これを対人で使ったことはなかった

使う機会がなかった

ギルド長としてワールドの長となつて戦闘をすることがなくなつてしまつて以来だつた

だから

「面白い」

そんな圧倒的な暴力に守護者達は防がれ弾かれ吹き飛ばされる

コキュートスの外殻は削られるだけに留まらず砕かれアルベドは防御に回した腕が砕かれアウラマーレへと向かつた武器はデミウルゴスによつて防がれたがデミウルゴスは腕と足が切り裂かれ身動きが取れなくなつてしまつた

シャルティアはドレスの胸元を切り裂かれ最早何も言えない

「貴様等、その程度か？」

「お前達！」

あまりの出来事にアインズが慌てる

「問題ありません！アインズ様！」

主を安心させるためにすぐ様体勢を立て直しギルガメッシュへと向かう

最早勝敗は決したようなものだった

完全武装で挑めばまだやりようはあつただろうが舐めていたといわざるを得ない

だがここで引けば自分たちの主人の顔に泥を塗ってしまう

それだけはいけないと回復アイテムや魔法、スキルを使い自身の身体を動けるようにして再び立ち上がる

「良い、良い顔だ、その顔に免じこの程度で済ませてやっても良いぞ雑種共」

「誰が！」

「我々ヲ」

「舐めるな！」

「フン！」

あの攻撃を前にしてこの顔

挑戦者の顔だ

隣に立つ少女を見ると一切の油断なく相手を見極めるような顔で守護者達を見ていた

まだ比べられるほどではないが近しいものを感じる

自分の譲れないものの為に立ち上がるうとするその様が

「その不敬、許そう」

そして取り出すのは常に形状を変え続ける黄金の鍵

「貴様等の忠誠に免じ拝謁するがいい」

王の財宝より指定して取り出すは世界の王にしか所有が認められない覇者の剣

「エアよ、一掃せよ」

その場にいる全員に悪寒が走った

「あれは・・・」

英雄王の右手に握られたモノ

形状は騎士の持つ突撃槍のようだが刃に相当する部分は3つのパーツに分かれ回転している

「ワールドアイテム、乖離剣『エア』」

（たしかワールドキングになった際に運営にねだって手に入れたアイテムだったはずだけど見た目とか効果はどこにも載っていないかった

な)

それはちよつとした興味だった

「〈道具鑑定〉」

初めて見るワールドアイテムについて知りたかった
だが表示されたのは「わからない」ということだけ
名前、分類、等級、性能、説明文

その全てがわからなかった

(なんなんだアレは！)

そんな疑問を持つアインズを置いて戦闘は続いていた

視界を覆うような暴力の権化を前にも怯まずに

アルベドの真なる無を盾に暴力の合間を縫い攻撃を仕掛ける

仕掛けられた攻撃は爆風によってかき消される

そんな戦場にあつた1人だけ場違いな者がいた

「ギルガメッシュ、流石にやり過ぎなんじゃないか!？」

「なに、加減はしている。殺すなど言われているからな」

「だから、また煽るようなことを！」

「ふはははは!!臆したか白野！」

「そんなことは、ない！」

「ならばそこで見ているがいい」

「だからアインズさんがすごいこつち凝視してるんだって!やり過ぎ
だつて！」

戦場でありながらそこだけはギャグのような

あと岸波白野のスカートが常時風に煽られパンツが見えている

「それは貴様の貧相な下着に哀れみを感じているからではないのか
?」

「な!？」

そんなやり取りをされて守護者達が許すはずがない

「油断を！」

「油断ではない、これは余裕というのだ」

「ソレハ慢心ダ」

「いうではないか」

戦いは激化する

より速く

より密度を増して

そして届く

連携やフェイクを重ねたその先に

「トツタ!!」

コキュートスの持った刀が

英雄王の顔に迫る

最早両腕を砕かれ武器を持つのも必死な者

足を砕かれ地に這いずる者

誰もが倒れ伏すのを堪える様な

その場の誰もが勝利を確信した

王と従者以外は

王へと届くはずだった刀による刺突

それは宙から伸びる鎖によって止められる

「見事だ」

明確に聞こえた賞賛の言葉

その言葉を境に両者の攻防が止む

「戦を知らぬ人形だと思ったが評価を改めよう」

英雄王の言葉に顔を顰める守護者達に発せられたのは

「自らを知り己の成すべきことを成す、その姿勢、見事だ。アインズよ、この者達の忠誠は見れたか」

確かな賞賛だった

構えは解かれていが守護者達の顔は驚きが変わっている

「ああ、ああ！見事！見事だ！守護者達よ、我がアインズ・ウール・ゴウンの誇る階層守護者達よ！お前達の力、確かに見届けた。」

自らの主の言葉に安堵する守護者達

「エアを前に良くあれだけ持ったものだ、その功績を讃えよう」

アインズにいくつかの回復薬を渡しその後は解散となった

目的

「これより先ほど行われた戦闘について意見交換を始めるわ」

ナザリック地下大墳墓の9階層の一室に守護者全員が揃ったことを確認しアルベドは口を開く

「誰か気がついたことはある?」

「ではまず私から3点挙げさせていただきます」

「いいわ、言いなさいデミウルゴス」

「まず一つ目、恐らく彼自身の戦闘能力は我々よりも遥かに低いと思われまます。」

「ソレハドウイウコトダ」

「彼は最初から最後まで我々の攻撃や妨害をすべて防ぐか弾いていました」

「それって当然のことじゃない?」

「いいえ、我々とレベルが同等であり装備も揃っているのならそれなりの耐性は有しているはずです。だからこそ、我々は耐性のある攻撃やスキルは無視します、ですが彼はすべてを防いでいた」

「た、耐性があっても痛いのが嫌だったんじゃない?」

「その可能性も捨てきれないが生命感知や看破などの魔法もあの波紋から現れた盾で防がれました」

「わざわざ?」

「ええ、耐性があるならばわざわざ防ぐ必要などないはずです」

「確かに・・・」

「続いて二つ目ですがあの波紋からの攻撃や防御を行う際ですが必ず波紋が出現してからしか武器や防具が出てきませんでした」

「準備が必要ということ?」

「ナルホド」

「なにがなるほどのなの?あれどこに出るかわかんないし数が多すぎて撃ち落すのめっちゃ大変なんだよ」

「奴ノ攻撃ハ全テ波紋カヲシカ行ワナイトイウコトハ波紋ヲ攻撃スレバ先手ヲ打テルトイウコトダ」

「あく、そういうことか」

「でもそれらを撃ち落とすのにスキルの回数やりキヤストが足りるかどうかが怪しいでありんすえ?」

「そこが問題でもあるね、だが我々はアインズ様の僕だ、彼がアインズ様に牙を向いた際に我々は彼に勝たねばならない」

「そういうことよ、シャルティア」

「さて、最後に三つ目だが彼の従者は先の戦闘でも彼の後ろにいた、従者であるならば主よりも前に出るべきであるのだ」

「そうだよ、ずつと見てるだけだったし」

「そこから推測できるのはあの従者は弱いがそれだけの価値があるという事です、ですのでそこを突くのも手になるかと」

「で、でもあの人狙ったのも全部防がれちゃいましたよ?」

「だったら防げないようにしちやえばいいんだよ」

意見交換は進んで行く

部屋に近づく者に気づかずに

「それではこれで意見交換を「雑種共よ!」

「?!」

突然の乱入者に守護者全員が警戒する

「どうしてあなたがここに?」

「なに、アインズに聞いてみれば先の戯れの意見交換をしていると聞いてな、この我自ら来てやったのだ!」

「すまない……止めたんだ……本当にすまない……嵐だと思って諦めてくれ……」

「あ、ああ、君も苦勞しているんだね……」

上機嫌な怨敵と心底疲れていそうなその従者に一同が激情するべきか同情するべきか困惑した

「どうした? 我に見惚れるのもいいが意見交換はどうした、良いぞ、我は今機嫌がよい、何でも答えてやろう」

「ギル、彼らは困ってるんだ、大人しく部屋に戻ろ! な!」

「い、いえ、構いませんが本当に何を聞いてもよろしいのですか?」

「ああ、よい、赦す。聞きたいことがあれば聞くが良い」

硬直から一番に回復していたデミウルゴスからの質問に英雄王ではなくA.U.O.となつてゐるギルガメッシュは上機嫌に答える

「では、あなたは何が目的でここにゐるのですか？」

「何が目的か？なんだ、そんなことでよいのか？」

「ええ、我々からすればこのナザリック地下大墳墓に来る人間は攻め滅ぼそうというものだけでした。あなたのような方を我々は怪しまなければならぬのです」

「なるほど、では答えてやろう。我がここにゐる目的を」

回復したほかの守護者達も耳を傾ける

敵対するような言葉があればすぐにでも攻勢に出れるように

「我がここにゐる目的。それはこの場所が最も愉悦を感じれる場所だからだ」

「愉悦……ですか？」

拍子抜けしたように力が抜ける守護者達とあまんと呆れる白野

「そうだ、我は我の支配の及ばぬ領域になど興味はない」

「世界征服には興味がないと？」

「だが世界を支配しようとする貴様等には興味が湧いた。この世界にはまだ見ぬ愉悦があるはずだ」

「そんなことの為に我々を利用すると？」

「そんなこと、とは言うではないか。貴様等にもあるだろう、己の内に芽生える悦びが」

「ッ！」

「それ、慌てるでない。我は手出しがしたいのではない、見たいのだ、他者の征服というものを、貴様等の願望を」

「我々の……願望？」

「主に尽くすのみなどと抜かしてくるなよ、貴様等は人形ではなくなつた、己を認識する生命となつたのだ。であるならば自らの内に願望を見るは道理だ」

英雄王の口の端が釣り上がる

言葉を紡ぐ事が

守護者達の様が

愉快的と面白いとでも言うかのように

「答えよアルベド、貴様は己の内にな何を望む」

「わ、私は・・・」

突然の名指しに口が勝手に動く

これは敵の罠だと

守護者達の本能が告げている

逃げなければいけないと

敵を滅さなければいけないと

「モモンガ様を愛したい・・・」

勝手に動く口が発した言葉

だが、本心であった

アルベドがそう告げると同時に守護者達が解放されたように動き出す

「貴様！何をした！」

「そう吼えるな、悪魔。我はただ奴の本音を聞いたただけだ。ああ、貴様はどうなのだ？」

「黙れ！我々は主に忠誠を誓う者！それ以上の悦びなど、ありはしない！」

「そうかそうか、忠誠の塊のような奴らよな。良い、その姿勢を認めよう。して貴様先ほどモモンガを愛したいと申したな」

身体の自由が戻った後にアルベドは動けなかった

だが顔を歪ませギルガメッシュを射殺さんとするほどに睨む

「・・・だったらどうだと言うの」

「良い、貴様等の忠誠は確と見届けた。故に赦す、貴様の愛が届くように見繕ってやる。」

「どういうこと・・・」

「骸骨の不死者を愛するのも不便であろう、ならば仮初でも肉体があったほうが心地よい、我はそういうアイテムも持っておる。それを譲ってやろうというのだ」

「なっ!?!」

「なに、気が向いたらまた呼ぶがいい、行くぞ白野」
「待ってくれ王様」

嵐のように現れ散々場を乱した英雄王は最後にアインズが頭を抱えて苦悩するであろう爆弾を投下し去っていた

そうやって頭を抱えて悩んでいると執務室のドアがノックされる

「失礼します、アルベドです。本日の報告に参りました」

「入れ」

現在はナザリック内の情報を統制しつつ外の情報を仕入れる為の準備をしている

「アインズ様、セバスとソリュシヤンの準備が完了し出立いたしました」

「わかった、二人からの報告はこちらにまとめておいてくれ、それから・・・」

次の話題に移ろうとすると

「アインズはここか！」

「すまない！失礼する！」

嵐と苦労人がやってきた

「ギルガメツシュ！執務室に入る際には確認を取りなさいとあれほど！」

「うるさいぞ女、我とモモンガは共に認め合った王だ。王同士が言葉を交わすに遠慮などいらん」

「すまない！本当にすまない！」

「よい、アルベドよ、して、ギルガメツシュよ、今日は何用か」

「そう畏まった言葉を使わずともよい不死の王よ、我達はここに来て数日が経つ、このままここで過ぐすもよいが我が雑種たる白野が『流石にニートはまずいぞ王様』などと言うのでな」

そこまで言ったところで場の空気が固まった

「ギルガメツシュが働く・・・？」

「あの英雄王が・・・？」

「貴様らの我を見る目はよくわかった。が、此度の不敬は許そう、この我とてニートと呼ばれるのは本意ではない、故にこの世界の面白アイテムでも集めてきてやる、それとな」

そう言いながら宝物庫から一つの指輪を取り出した

「アインズよ、以前期間限定で出たハロウィンイベントの最高ランカーの報酬アイテムは何か知っているか？」

「ワールドアイテムクラスのアイテムだということしかわかっていないが、もしやそれが？」

「そうだ、期間中にハロウィン系モブやボスをどれだけ狩れたかで決まるイベントでこの我がワールド1位を逃すはずがなからう」

「それで、その指輪がそうであると」

「そうだ、ものは試した、つけてみるといい」

めちやくちやに怪しいが部下の前で疑いすぎるのもよくないが英雄王の上機嫌な顔でどうしても嫌な予感しかしない

「では……」

「アルベド、貴様がアインズにつけるのだ」

「待て、それは本当に害のないアイテムなんだろうな」

「そう疑心暗鬼になるな、これはただのワールド級のジョークアイテムだ」

ワールドアイテム級のジョークグッズ、その言葉に啞然としているうちにアルベドがそそくさとアインズに指輪をはめてしまった

「なっ!？」

「流石だな……」

「ああ……」

その瞬間に指輪が光だしアインズの目の前は真っ白になった

アルベドとくんずほぐれつの格闘でそれどころではなさそうである

「御託はいいからさっさとたすけろ！」

「全く、そう焦らずともその身体でもステータスは変わっておらん、女一人容易いであろう」

「こんな身体でコントロールが効くわけないだろ！」

「うつわなにあのおっぱい羨ましくはないけど！」

「貴様は誠にブレん奴よな、まあよい」

そういうと天の鎖でアルベドを拘束しアインズを救出する

アルベドが暴れ鎖が軋みを挙げているがしばらくは持つだろう

「ギルガメツシュ！これはどういうことだ!!」

「それは先ほど説明してやったではないか」

「アイテムの効果ではない！アルベドになにをした！」

「なに、貴様がこやつにしたことを実現させてやったただけだが？」

「なっ!!」

「ギルガメツシュ！それ以上は！」

「黙っておれ、白野よ。こやつにはな、覚悟が足りぬ、他の雑種どものほうが余程できている。」

「なんだとっ！」

「貴様は自らがこの女にしたことを悔いているな？」

「っ！」

「その程度のこと、見ずともわかる。この女のビルドは本来淫魔の類のものだ、大方設定を変更して己を愛させたのだろう」

「そんなことができるのか？」

「本来ならば不可能だがそういうアイテムがないわけではない」

「ぬうううううううう！」

「なかなか怪力のようなだな、そこな女よ、貴様の気持ちはどうだ」

「私の忠誠は、気持ちは変わらないわ！」

「そうか、アインズ、いや、モモンガよ」

「っ！なんだ」

「命じたのであればそれを全うさせるのも王の務めだ、それが果たせぬのであれば貴様はなんの為に支配者となったのだ」

「それは・・・」

美少年が俯き迷い悩む

「すぐにとは言わぬ、だがそれが分からなければ遠からず貴様は立ち止まることになる」

そう言い放ち英雄王は部屋から去っていった

去り際に「あと指輪はアルベドに外してもらえ、自分でつけければ自分の望む姿になるだろうよ」という言葉を残して

「あの、私の言う言葉をあまり聞いてはもらえないだろうが、応えてもられない愛情ほど、つらいものはないとおもう」

そう言うとき岸波白野も去っていった

「アインズ様、先ほどは申し訳ありませんでした・・・ですが私は、私は・・・」

「いい、わかっている・・・わかっている」

ラツキースケベ？

(なんだったんだ、私はどうすれば……)

ギルガメツシユの言った言葉は間違っではない

だが自分がどうすべきかがわからなかった

一対一ならなにか教えてもらえるのではとギルガメツシユのいる部屋に向かっているアインズは悩んでいた

これからの自分たちのすべきことにも、アルベドたちとの接し方にも

「英雄王よ少しばかり話が」

迂闊だったと言うべきかこれも狙われていたのか全力でA U Oを殴りたい気持ちと自らの前の状態をどうすべきかでアインズは固まってしまった

「す、すまない……今服を着る」

下着姿の岸波白野がこちらを見て顔を赤らめていたのだった

「す、すまん！」

瞬間解凍した思考でドアを閉めてドアに凭れ掛かる

(うひおえああああああ、どうしようこれA U O見てるんなら出てこい！ぶん殴ってやる！)

先ほどのこととといい今の出来事といい今日は精神沈静が多発する日である

「もう大丈夫だ、ギルに用事だったか？」

「あ、ああ……」

「ギルなら『雑種共に本当の酒とは何かを教えてやる』とかなんとかでバーにいますと思う」

「そうか、お前は自分の下着姿を見られてもあまり騒がないのだな」

「ん？ああ、こちらこそ貧相なものを見せてしまつてすまない」

「いや、どちらかと言えば綺麗なのではないか？いや、そうではなく普通なら『キヤー！』とか『エッチー！』とかそういうリアクションが出るものだと思つていたからな」

「私は、ほら、いつも一緒にいるのが……」

「苦勞しているんだな・・・」

「もう慣れたよ、ところで王様に相談というと先ほどのこととこれからのことについてだろうか？」

突然の本題と内容の確さに一瞬、心でも読まれたかと思ったが目の前の少女があの英雄王が唯一隣に置くNPCであるということを感じ出し持ち直す

「ああ、アルベドのこともだがこれからのことについてもな」

「王様のことだからさっきのこと以上の話はしてもらえないと思う、ああ見えて女性についてはあんんだから、でもこれからのことだけど『アインズの好きにするがいい、我も好きにやる』だって」

（それに悩んでるから相談がしたいんだよ！っていうか読んでたな!?!）

「私は自分がNPCだと知っているし設定なんていくらでも弄れる事も知っている」

「そう創られたからか？」

「いや、あの人がいつも話してくれてたから」

『貴様はあくまでも模造品にしか過ぎぬ、いくらでも作り替えの利く量産品よ』

「でも」

『だが、あの時の貴様はそれでもなお自らを奮い立たせ前に進み続けることを選んだ。貴様にも、その心が受け継がれていると我は信じる』

「あの人らしくないけれど、あの時の、私はあの人の隣に立ち続けたいと思った気持ちは贗物じゃない」

「そうか・・・」

（わかっているつもりだった。だけど、俺はそれを受け止めていなかったんだらうか）

「だからといってアインズさんにどうしろとは言えないけれど、アルベドさんの、モモンガさんへの気持ちは設定以上に本物だと私は思う」

「そうか、お前と話せてよかった。ギルガメッシュさんはバーにいる

んだな？」

「うん、そのはず」

「では、失礼した」

自分を愛する者への気持ちの答え方は分からないが

逃げずに受け止められるようにしようと気持ちを固めながら

あととりあえずギルガメツシユは一発殴ろうという気持ちを胸に
モモンガはバーへと向かうのであった

「フハハハハハハハッ！よいぞ雑種！赦す！我自慢の酒の味が分かる
貴様、実に良い」

「ぎ、ギルガメツシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
!!!!!!!」

ここにきて

「それでアインズよ、貴様自らが冒険者として町へと向かうのだな？」
「ああ、やはりナザリック内からの指揮だけでは、未知の世界故の間違
いもあるだろうと思つてな」

「そうか、では我と白野にも同行してほしいというのは？」

「英雄王よ、あなたは言わずともこの世界を見て回るつもりでいるん
でしよう？」

「そうだ」

「ならこれからこの世界は私を、私達を中心に回る。その光景を特等
席で見たいとは思わないか？」

「つくつくつくつく、アインズよ、貴様は我を興に乗せるのがうまく
なったではないか」

「王様は分かるんだが私は？」

「岸波殿には人間としての意見を聞かせてほしい、何分我らは異業種、
人間についての知識が足りていない」

「なるほど、王様がいいなら私はそれについていく」

「助かる、こちらはナーベラル・ガンマと私の二人で行く」

「よくあの女がそれを許したな」

「あ、ああ・・・」

あの女とはアルベドのことだ

それはもう大反対で行くならば自分も付いていくと言って聞かなか
ったがデミウルゴスが耳元で何かを言った途端に満面の笑みでO
Kを出してくれた

「それで私とナーベラルは冒険者モモンとナーベという偽名で通させ
てもらおうが二人は・・・」

英雄王はなんでそんなことでも言うように肩をすくめたが岸波
白野はなぞのポーズをキメて

「フランシスコ・ザビっ!？」

「阿呆か貴様」

AUOにチョップを喰らっていた

「ハクノで行きます・・・」

ギルガメッシュはというと

「これは貴様等の物語だ、ならば我はその時が来るまで待たせてもらう」

そういうと王の財宝から一つの小瓶を取り出すとそれを飲み干した

するとギルガメッシュの姿が見えなくなるほど光りだした

「ではしばらくは僕が皆さんと同行させてもらいますね」

謎の光が収まると傲岸不遜唯我独尊な英雄王は絶世の美少年になっっていた

「え、あ、は？」

「どうしてギル君が？」

「一応の変装ですね、大人の僕だとアインズさんたちの出番を奪ってしまいかねませんか」

「気遣いは助かるがそれで英雄王は楽しめるのか？」

「大人の僕が出るべきはその時に出てこそというものです。というわけです。よろしく願いますね岸波白野さん」

「こちらこそよろしくねギル君」

自分の従者に向かつてにつこりと微笑む美少年があんなのになると誰が予想できただろうか

(詐欺だ・・・)

「ん、ん、っ！英雄王がそれでいいというならこちらは問題ない。出立の予定は明日、エ・ランテルという町の手前から歩いて向かう、それでは解散にしよう」

「わかりました、では白野さん、行きましようか」

そう言つて自室へと戻つていく二人はおねシヨタと言うよりシヨタおねだが大丈夫なんだろうか

ギルガメッシュに弄られないという安心とこれで大丈夫だろうかという不安を抱えて出立への時間は刻一刻と過ぎていくのだった

漆黒の戦士と愉快な仲間たち

その日のエ・ランテルはいつもと変わらない日常だった

そんな日常では見ないような光景が住民や冒険者達の前に繰り広げられていた

「それでモモンさん、まずはどうするんですか？」

「冒険者組合という場所があるそうなのでまずはそこで冒険者として登録しようかと」

「わかりました、僕たちもご一緒してもいいですか？」

「構いませんが・・・」

「すまない、モモンさん」

「構いませんよハクノさん」

「・・・」

漆黒のフルプレートと並ぶ金髪赤眼が目立つ小柄な美少年、その二人についていく草臥れてはいるが美少女に黒髪ポニーテルの美女

そんな集団が冒険者組合へと向かっていく

目立たないわけがない

「ここですね、ではいきましよう」

美少年を先頭に受付へと向かう

ここにくるまでに周りからの好奇心や嫉妬の入り混じった視線が多く突き刺さっているが草臥れた少女以外はどこ吹く風状態である

冒険者登録を済ませ組合に紹介された宿へと向かう

「冒険者とは言いますけどこれただの何でも屋ですよね」

「私も少々期待してはいたんですがそのようですね」

「モモンさんでも冒険にはわくわくするんですか？」

「もちろんですよ」

「ギル君、着いたみたいだよ」

ギルドからそう離れていない場所にあるその宿は

「案内された時点でわかってはいましたが」

「駆け出し向けの安い宿って言う奴ですね」

「私は大丈夫だが、ギル君とアインズさんがここ入るのか？」

「僕は特に構いませんよ？大人の僕なら一番高い宿に向かいそうですけど」

「それじゃあ入りましょう」

若干立て付けの悪いドアを開けて店内に入る

室内にしては暗いその空間は酒場となっているのだろう

それなりに広くなっているその奥にカウンターや酒棚がある

「ちよつと暗いですね」

その声を聞き下卑た笑いがそこかしらから聞こえる

ガキだぜ、おいおいここは酒場だぜ、ママのミルクならここにはねーぜ

一瞬にしてアインズと白野が目を合わせてから子ギルを見るが本人はどこ吹く風のようにだ

「どうしたんですか？二人とも」

「いや、なんでもない」

それなりに汚い場所であることは予想していたがここまでとは思わなかった

どこを見ても汚物が目に付くのだ

アインズは内心でため息を吐き出すと店の奥へと向かった

「宿だな。何泊だ」

「一泊でお願いしたい」

「銅のプレートか。相部屋で1日五銅貨だ」

「出来れば二人部屋を2つお願いしたいのだが？」

後ろから微かに鼻で笑ったような声が聞こえた

「この街には冒険者御用達の宿屋はうちを含めて三軒ある。その中で一番下が俺の店なんだが……組合の人間にここを紹介されたんだろうが、どうしてか分かるか？」

「分からないな。教えてもらえるか？」

即答するアインズに店主がドスを効かせた声で怒鳴る

「ちつとは考えろ！そのご立派な兜の中はガランドウか！」

「(伽藍の堂へようこそ〜って?)」「(白野はなにを言っているんですか?)」「(ごめんわすれて)」

「ちつ……それなりに肝は据わってるようだな。ここに泊まるのは大体が銅か鉄だ。同じ程度の実力なら手を組んだりする可能性がある。そうやって駆け出しの仲間を探すのに俺の店がもってこいだからだ」

「個室に寝泊りするのはいいが接点がなけりやあ仲間は出来んぞ、後ろにいるのをお守りするんなら、そういうことも必要だ。最後に聞くぞ、本当に二人部屋で良いんだな?」

「ああ、構わない。あと食事は必要ない」

「あとで後悔するんじゃないぞ。一日七銅貨。前払いだ」

銅貨を支払い階段へと向かう先へスツと行く手に足が出された

アインズはその足の主を見るとため息を吐き出し軽く蹴り払う

「おいおい! いてえじゃねえかよ!」

「そうか。この兜だと視界が悪くてな。足があつたのが見えなかったよ」

「足が短くて見えなかったとか?」

「あゝあゝん!」

「くつくつくくく」

「ぐつく、ま、まあいい。俺は寛大だからな、その女二人を一晩貸してくれたら許してやんぞ?」

男がそう言った瞬間にその場が凍った

「まあまあ、そう怒らないでください」

全員の目がその少年へと集まった

「ところで、いったい誰の許可を経て誰を貸して欲しいんですか?」

見惚れるような美少年は何事もなければその場を和ませただろう

「聞いているんですよ? 誰を貸して欲しいって?」

その少年から感じる圧力に全員が屈している

「ギル君、私は良いから」

そんな中で本来なら怒る側のはずの少女が彼を制止した

「てめえらいたい」

「お前はもう黙れ」

そう言つてアインズが男を軽く払うと

「うゝっ?!」

華麗な放物線を描いて

「うつきよおおあああああああああ
!?!?!?!」

とあるテーブルへと落下した

そこからその場の收拾は早かった

アインズの膂力を知った男達は平身低頭になり悲鳴の主に割られた
たポーシヨンの弁償を求められマイナー・ヒーリング・ポーシヨンを
渡しその場は収まった

「部屋に着く前に疲れてしまいましたね」

「そうですね」

「は、ははは」

「・・・」

さっきの奴ら何者だったんだ? 全身鎧の野郎もだがあのちっこい
ガキもなんだありや、なんかやばいやつだな、逆らっちゃいけないよ
うな

酒場での話題はさっきの出来事で持ちきりだった

「おいブリタ、さっきからどうした」

「おやっさん、こいつさあ」

「ん?なんでえそりやあ」

「さあ」

「さあっておめえ」

漆黒の剣

(やはりというか当たり前というか)

(字が読めませんね)

アインズ達は冒険者組合に来ていた

それは昨日

「僕は宝石を持っているのでそれをお金にしてくれればいいと思うのですが、それでは駄目なんですか？」

「ユグドラシルのアイテムがこの世界でどのような扱いを受けるのか分かっていない以上、安易に市場に流さないほうが問題を起こしにくいと思うのだが・・・」

「確かにそうですが僕の設定上ある程度のお金は必要ですし、一番質が悪い宝石でも、この街ではそこそこのいい値段にはなると思います。」

「とりあえず、明日冒険者組合で仕事を探させてくれ。まずは自分たちで稼いがないては。それにギル君のような美少年が質屋に入るのは流石に目立ってしまう」

「なら仕方ないですね。わかりました、明日は仕事探しをしましょう」というやり取りがあったからだ

(仕方ない…)

アインズは内心覚悟を決めて一枚の依頼を掲示板から剥がしカウンターへとそれを置いた

「この依頼を受けたい」

カウンターに置かれた依頼に目を通し受付嬢の表情に困惑が浮かぶ。そして苦笑いと共に

「申し訳ありませんがこちらはミスリルプレートの方々への依頼なので・・・」

「知っている。だから持ってきた」

「え、あの・・・」

「私はそれを受けたいのだ」

「え？あ、いえ、そう仰られましても、規則でして」

「くだらん規則だ。昇格試験を受ける日まで、あんな容易で見窄らし

い仕事を繰り返せというのが不満だな」

「依頼に失敗した場合、多くの方の命が失われる可能性があるからです」

受付嬢の声にはこれまで冒険者達の努力によって培われてきた組合の評判も、という声なき声が含まれているようだった

「ふん」

アインズの嘲笑に周囲の冒険者達の表情が、受付嬢と同じく敵意で固くなる。

今まで自分たちが守ってきた規則を馬鹿にする新人だ。当然の態度だと、アインズも思う。

アインズである鈴木悟というサラリーマンの残滓が周囲の全員に全力で頭を下げていた

だが今回は簡単には引き下がれない。元より引く気ではあるが、あの程度の状況まで持っていかなければならない。

だから切り札を出す

「後ろにいる私の連れ、ナーベとハクノは第三位階魔法の使い手だ」

ざわりと驚愕の視線が一気に二人へと移る。この世界では第三位階は魔法詠唱者として大成した者の領域とされている。

嘘か誠か。周囲の目がその二つの間で揺らぎ、アインズとギルへと動く。

冒険者たるもの、強さに比例して装備品はより良いものへと変えていく。

仲間と思われるアインズの纏う立派な鎧は何よりの説得力があった。

周囲からの見る目が変わったことに気づき、アインズは自身の演技に内心で喝采を送りながら、もう一手を打ち込む。

「そして私と彼も当然彼女たちの強さに匹敵するだけの力を持っている。我々であればその程度の仕事は容易と断言できる」

先ほどに比べれば周囲の驚きは小さいがそれでもアインズ達を見る目が変わったのは掴めた。

「私は銅貨何枚の容易な仕事をしたくて、冒険者になったのではない

のだ。私達はもつとレベルの高い仕事を望んでいる。もし力が見たいというのであれば見せてやろう。だからその仕事を受けさせてはくれないかな？」

先ほどまであった敵意は薄れている。確かに、もしくはなるほど。そういった雰囲気は広がり始めていた。

冒険者という強さを重視する彼らには、アインズの言葉は理解出来るものだったためだ。

しかし受付嬢は違う。

「……申し訳ありませんが規則ですので、それは出来ません」
頭を下げての謝罪に、アインズは内心でガツポーズを取った

「そこまで言うのであれば仕方がないな……我が儘を言つて悪かった」

アインズも頭を軽く下げる。

「では銅のプレートで最も難しいものを見繕つてくれないか？」

「はい。それならば可能です」

受付嬢が立ち上がり、アインズが完全な勝利に精神的に感涙しようとしたときに

「それなら私たちの仕事を手伝いませんか？」

「おおん？」

ドスの利いた声がつい漏れてしまった。取り繕うように視線を向けた先にいたのは4人組の冒険者だった

(銀のプレートですよモモンガさん)

(折角誘導が完璧に上手くいったのに……)

(まあまあ、話だけでも聞いてみましょうよ)

(わかっています)

「仕事というのは……やりがいがあるもの……でしようか？」

「うん。まあ、あると言えばあると思いますよ」

一行のリーダーと思しき男が返答した。

帯鎧を着た戦士風の男だ。

自分たちだけで仕事をこなすのも良いがコネ作りや情報、名声の発

信源という可能性を考え

アインズはゆつくりと頷いた。

「やりがいがある仕事こそ望んでいたものです。ギル君もそれでいいか?」

「僕はアインズさんにお任せしますよ」

「わかりました。では一緒にやらせていただきますでしょう。一応どんな仕事なのか聞かせていただけますか?」

その返事を聞くと戦士風の男は受付嬢に依頼して部屋を一つ用意させた。

「こちらからの話を受けていただきありがとうございます。まずは簡単な自己紹介からさせていただきますね」

先ほどの戦士風の男が代表として声を上げた。

「初めまして、私が『漆黒の剣』のリーダー、ペテル・モークです。」

四人の冒険者

「初めまして、私が『漆黒の剣』のリーダー、ペテル・モークです。」
そう先ほどの戦士風の男が代表として声を上げた。

「俺は野伏、ルクルット・ボルブ」

皮鎧をまとった金髪の男が、軽く頭を下げる。茶色の瞳がおどけるように細まっていた。

全体的に痩せ気味で、やけに手足が長く、蜘蛛を彷彿とさせるフォルムだ、だがその細い体は無駄なものを可能な限り削った結果のようだ。

「そして魔法詠唱者であり、チームの頭脳。ニニヤスベルキャスター【術師】」
「よろしく」

この中では最年少だろう。大人というには若々しすぎる笑顔浮かべ、軽くお辞儀をしてくるのは濃い茶色の髪に青い瞳の持ち主だ。

他のメンバーよりも肌が白く、顔立ちも中性的な美形で声もやや甲高い。

ただ、浮かべる微笑は仮面でも作り笑顔でもない何かだった。

服装も他のメンバーが鎧などを着ているのに対して革の服程度しか着ていない。

「……しかし、ペテル。その恥ずかしい二つ名やめませんか？」

「え？いいじゃないですか」

「二つ名持ちですか？」

それがどの程度のことか分からず不思議そうなアインズに、注釈を入れるようにルクルットが口を出す。

「生まれながらの異能タレを持っていて、天才といわれる有名な魔法詠唱者なんだよ、こいつ」
魔法詠唱者マジックキャスター

「ほう」「へえ」

アインズとギル君は声を上げる。生まれながらの異能タレは陽光聖典の者を三人つぶしてまで引き出した情報だ。その実例が目の前にいることに喜びを感じてしまった。

対してナーベラルからは微かに嘲笑の鼻息が聞こえるが、相手には

気が付かれなかったことにアインズは安堵する。取引先で駄目な部下が変なことをしてかした上司の気分で、一瞬だけ軽く腹を立てたりもするが、この場でもめ事を起こすのは不味いとすぐに冷静さを取り戻す。

「別にすごいことじゃないですよ、たまたま持っていた生まれながらの異能がそっち系統だったというだけで」

「ほう」

アインズたちが得られた生まれながらの異能についての情報は、その人物との噛み合いや内容によつてはあつてもなくても変わらない。

だが、戦闘に使える生まれながらの異能持ちは冒険者に多いらしい。そんな中、目の前の人物は見事に噛み合った幸運の結晶とも言えた。

「魔法適正とかいう生まれながらの異能で習熟に八年とかかかるのを四年だっけ？まあ俺は魔法詠唱者じゃないからそれがどれくらいすごいのかいまいちピンと来ないんだけどな」

アインズは同じ魔法職としての好奇心とグッズコレクターとしての欲望にかられる。

そんなアインズに気付かず、二人は会話を続けている。

「……この能力を持つて生まれたのは幸運でした。夢をかなえる第一歩を踏み出せたのですから。これがなければ最低な村人で終わってましたよ」

ぼそりと呟いた声は低く暗く重い。それを払拭する目的で上げたペテルの声は当然、正反対だ。

「何はともあれこの都市では有名な生まれながらの異能持ちだということですよ」

「まあ、わたしよりもっと有名な人がいますけれどね」

「青の薔薇のリーダーか？」

「その方も有名ですけど、この街にいる方の中ですよ」

「バレアレ氏であるな！」

まだ名を聞いていない最後の一人が重々しく、かつ大声で人の名前を口にした。それに興味を引かれ、アインズは問いかける。

「……その方はどんな生まれながらの異能をお持ちなんですか？」

すると四人が驚いた表情を浮かべた。どうやら知っていて当然な情報だったらしい。

「なるほど、それだけの立派な鎧を纏い、噂になってもおかしくない美女を連れていながら、全然私たちが知らなかったのはこのあたりの人ではないからですか」

渡りに船とアインズは頷いた。

「まさにその通りです。実は昨日来たばかりなんですよ」

「ああ。じゃ、知らないですかね？この都市の有名人なんですが、さすがに遠くの都市までは広がってないかな？」

「ええ、聞いたことがありますでした。よろしければ教えてくださいませんか？」

「名前はインファイレア・バレアレ。名の知れた薬師の孫にあたる人物で、彼が持つ生まれながらの異能はありとあらゆるマジックアイテムが使用可能という力です。」

「……ほう」「……へえ」

アインズとギルは自分たちの声に警戒感を匂わせないように、苦しめて声を出す。

その生まれながらの異能はどこまで使用できるのか、ギルド武器であるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンやワールドキング専用ワールドアイテムである乖離剣エアですら使用可能なのか。はたまた限界があるのか。

警戒すべき存在。しかし利用価値はある。

ナーベラルも感じ取ったのだろう。ヘルムの下に耳があればここだろうという個所に口を近づけると、警戒色の強い声を投じてくる。

「その人物、危険かと思われます」

「……わかつている。やはりこの都市にきて正解だったな」

「モモンさん、どうかされましたか？」

「ああ、いえ。お気になされずに。それよりも最後の方の紹介をお願いしてもよろしいですか？」

「はい、彼は森司祭^{ドレイド}・ウツドワンダー。治癒魔法や自然を操る魔

法を使い、薬草知識に長けていますので、何かあったら直ぐに相談してください。腹痛などにもよく効く薬とかもありますから」

「よろしくお願いするー!」

口周りにぼさぼさと生えた髭と、かなりがっしりした体格が野蛮人じみた印象を抱かせる男が重々しく口を開いた。とはいってもアインズの外見よりも若いのだが。

「では次に私たちの番ですね。こちらがナーベ。彼はギルで彼女がハクノ、そして私がモモンです。よろしくお願いします。」

「よろしく申し上げます」「よろしく申し上げますね」「よろしく申し上げます」

「はい、こちらもよろしく申し上げます。それではモモンさん方が私たちを呼ぶ際は名のほうで呼んでいただいで結構ですよ。さて早速で申し訳ないのですが、仕事の話に移りたいと思います。えっと、実のところ仕事というわけでもないんですよ」

「それは……」

「この街周辺に出没するモンスターを狩るのが今回の目的です」

「モンスター討伐ですか……?」

それは十分に仕事という範疇に入ると思われた。それとも何か冒険的な理由があつて、仕事はないというのだろうか。アインズはそのあたりの疑問を投げかけたくなるが、それが一般的な常識であつた場合、あまりに知識が欠乏していると思われるのもまずい。だからこそ当たり障りのない範疇で、ボールを投げてみた。

「なんとというモンスターですか?」

「あ、いえ。そつちじゃなくて、モモンさんの国では何というのでしょうか? モンスターを狩るとそのモンスターの強さに応じた報奨金が組合を通してでますよね、それです」

なるほど。

そこからその報奨金についての会話が続き国の王女やニニヤの貴族嫌いに話が変わっていくのはダイーンが軌道修正するまで続いた。

「まあ、そんなわけでこの周辺を探索することになります。文明圏に近いためさほど強いモンスターは出ないでしょうから……モモンさ

んたちには少しばかり不満でしょうか？」

「素晴らしいながらペテルは羊皮紙の地図を開く。」

「基本的に南下してこの辺りを探索します。」

羊皮紙の中央から南方の森の近辺を指で指し示す。

「スレイン法国国境の森林から出てきたモンスター狩るのがメインですね。後衛まで攻撃を飛ばしてくるような道具を使ってくるのはせいぜい小鬼ゴブリンぐらいですか」

「まあ、弱いから、ぶっ殺しても報奨金はやつすいけどな」

一行の余裕に、アインズとギルは微かな疑問を感じた。

アインズ達の知るユグドラシルの小鬼ゴブリンはレベル帯が広く、決して小鬼ゴブリンと一括りで考えていい相手ではない。下手をすれば痛い目を見る可能性もある。

彼らの態度は高レベル小鬼ゴブリンが出ないと確信しているためか、もしくはこの世界では小鬼ゴブリンはその程度の力しか持っていないのだろうか。

「強い小鬼ゴブリンというのはいないのですか？」

「確かに強い小鬼ゴブリンはいます。ですが我々が向かう森からは出てきません。というのも強い小鬼ゴブリンは部族を支配する立場です。部族すべてを上げて動くということは考えにくいんですよ」

そこからは出没する可能性が高いモンスターの種類などの情報を教えてもらい、協力することを決めて歓談の場となっていく。

「はいー」

「あなた方はどのような関係なんでしょうか！」

アインズとギルはその意図を計りかねて。ペテル達一行はルクルットの意図を鋭敏に理解して。

「仲間です」「そうですね」

アインズの返答に対して続いたルクルットの発言に、場の空気は大きく乱れた。

「惚れました！一目惚れです！付き合ってくださいー！」

冗談によるコミュニケーションでないことは一行の顔を見ればわかった。

そして視線を送られたナーベの返答は。

「黙れ、^{ナメクジ} 下等生物。身の程をわきまえてから声をかけなさい。舌を引き抜きますよ?」

「あ、え……」

「厳しいお断りの言葉ありがとうございます!では友達から始めてください!」

「死ぬ、^{ウジムシ} 下等生物。私がお前の友人になどなるはずがないでしょ。目をスプーンでくりぬかれないの?」

「?」

マゾとサドのやり取りから目を離し、ペテルとアインズは互いに頭を下げあう

「……仲間がご迷惑を」

「いえこちらこそ申し訳ありません」

「ハクノさんはああいう方はどう思いますか?」

「どうして私に振るのギル君。私はギル君だけの従者だから、ほかの人からの好意ってよくわからないんだよね」

「ハクノ氏はギル氏の従者ということとは、ギル氏は貴族であるか?」

「いえ、僕は貴族とかそういうのじゃないですよ。ただハクノがこうやってついてきてくれてるだけです」

「お二人は仲がよろしいですね」

「どうぞどうぞ」

そんな他愛ない会話をしていると受付嬢の一人が入ってくる。

「ご指名の依頼が入っております」

その一言に様々な疑問が湧くが、とりあえずは確認をしなければならぬ。

「一体、どなたが?」

「はい、ンファイレア・バレアレさんです」

アインズは、やはりと思った。受付嬢の後ろから少年が顔を覗かしている。

しかし、先にペテル達と仕事を共にすると約束した身で直ぐに引き受けるというのも気が引ける。

そんな矢先にギルが助け船を出す。

「その依頼は僕達だけでなければいけない依頼ですか？」

「いえ、そちらの方たちがよろしければご一緒していただいてもかまいませんよ」

「御高名な薬師のお孫さんからの依頼となると薬草採取かその護衛、違いますか？」

「すごいですね。そうです、これから近場の森まで薬草を採取するのに護衛を依頼したかったんです」

そこまで来たところでアインズが声を上げる

「なぜ我々を？我々はい最近、この街に馬車に乗ってやってきました。ですのでこの街に親しい友人もおりませんし、知名度だってありません。にも関わらずなぜ、私を？」

「今まで雇っていた方々がエ・ランテルを出られて、別の街に行かれたようなんです。それで新しい方を探していたところにあなた方の話が耳に入りました」

「我々の話？」

「はい、宿屋で一つ上のランクの冒険者を吹っ飛ばしたという話を聞きました、それに銅のプレートの方でしたらお安いので、長くお付き合っていていただければなど」

「なるほど」

そういうことならば納得がいく。

それから以来の細かな内容や報酬について相談を行った。その最中、終始マゾとサドのやり取りやハクノの膝に座るギル君をみて和んだり和気あいあいと時間を過ごし

「では、準備を整えて出発しましょう！」

モモンとギルの異世界転移後初めての依頼がスタートした

夜闇の中、フードを被った人影が滑るようにエ・ランテルの巨大な墓地を進んでいた。

不気味なその様は亡霊のような何かを彷彿とさせる。霊廟までた

どりに着いたその影はフードを外し中へと入っていく
「ちわー。カジットちゃんに会いに来ただけだよー?」

旅路Ⅰ

エ・ランテルより東北に位置するカルネ村に向けて、馬車で進むルートは大きく分けると二つある。北上し、森の周辺に沿って東に進むルート。それと、まず東に進み、それから北へ進路を変えるルートだ。

今回選んだのは前者のルートである。

森の周囲に沿って進むのは、モンスターとの遭遇率が若干高まり警護という観点からすると間違った選択ではある。

にも関わらずそのルートを選択したのはアインズがペテル達と最初に受けたモンスター討伐の依頼のためだ。二兎を追うものは一兎をも得ずという危険もあつたが、それでも「モモンたちがいる」という強力な存在がいるのならばという安心感がこのルートを選ばせた。それと、街の外で第三位階の魔法が使えるという証明としてナーベラルと岸波白野が使用した〈雷撃〉や〈電撃球〉もその一因となっているだろう。

そもそも森の奥ではなく、平原との境界では、それほど強大な力を持つモンスターは出現しないならば対処も十分に可能だろうし、実戦を行うことで互いのチームの能力を確かめられるという判断から、行きはそのルートを使おうという話がまとまった。

エ・ランテルを出立し、太陽が頂点を過ぎる頃、遠くに視線を向ければ黒緑の塊としか思えないほどのうっそうと茂った原生林がその姿を見せた太い木々が直立し、その見事な枝を大きく広げているために日差しが入らない森の中は視界が悪く、闇に飲み込まれていくような感覚すら覚える。ぼつかりと開いた木々の隙間が、飛び込んでくる獲物を待って口を開いているような、そんな得体の知れない不安を煽った。

一行は中央に馬車を据え、御者は当然ンフィーレア、馬車の前を歩くのが野伏ルクロット、馬車の左側に戦士ペテルとギルと岸波、馬車右側に森祭司ダインと魔法詠唱者ニニヤ、後方にアインズとナーベラルという隊列で移動をしてきた。

視線が通るということもあり、ここまでさほど警戒してこなかったが、ここに来て始めてペテルが少しだけ堅い声を発した。

「モモンさん。この辺りからちよつと危険地帯になってきます。対処不可能なモンスターは出ないと思いますが、念のため少しだけ注意してください」

「了解しました」

額きつつ、アインズはふと思う。

ゲームであれば遭遇するモンスターは場所によって決まっている。しかし現実でそんなことはありえない。どんな厄介な敵が出るかはまさに神のみぞ知るだ。

アインズは先日のカルネ村での戦い、そしてそこで捕まえた陽光聖典の者たちからの情報によって、己の強さには自信を持っていた。しかしながらそれは魔法詠唱者としての強さだ。今のアインズは魔法によって作り出された鎧を着ており、殆どの魔法が唱えられない。

そんな自分の長所が殺された状態で前衛としてどれだけ通じるか。更に護衛である以上、敵との戦いに勝つのではなく、ンフィーレアを守るという勝利条件を達成しなければならぬ。こうしたことを考えて若干の不安を抱いていた。

いざというときは鎧を消し去って、魔法で対処するつもりだが、共に旅するこの一行を殺すか記憶操作するかしなくてはならぬ。になるので、そうやっては欲しくない。

(面倒だからな)

アインズは頭を動かし、ナーベラルと岸波に視線を送る。それを受け、ナーベラル達が一つ頷いた。

いざというときはナーベラルと岸波が第三位階より上位、最高で第五位階の魔法を唱える手筈となっている。それで片がつけば良し。無理であればギルが王の財宝ゲイト・オラ・パレロンを使用し、アインズが鎧を脱ぎ去り、少しばかり本気を出す。

そんな二人のアイコンタクトへアインズは面頼付き兜を被ったままだが、何を見ても、何を勘違いしたのか、ルクルットが戯けるような軽い口調で話しかけてくる。

「大丈夫だって。そんなに心配することはねえって。奇襲でも受けない限りそんなにやばいことにはならねって。そして奇襲なんか、俺が耳であり目である限りは問題ナツシング。なあナーベちゃん。どうよ、俺すごくくない？」

キリリツと真剣な表情を浮かべる男を、ナーベラルは嘲笑する。

「この下等生物は……叩き潰す許可をいただけますか、モモンさん？」
「ナーベさんの冷たい一言頂きました！」

親指を立てたルクルトに対し、みな苦笑いを浮かべているが、きつい言葉をかけたナーベラルには誰も何とも思っていないようだった。ナーベラルが人間という種全般を下等生物と呼んでいるのではなく、特定個人のみと言っていると思ってくれているようだった。

アインズはナーベラルの本気の懇願を却下し、ないはずの胃が痛むような感覚を抱いた。人間と共に旅しているのだから、もう少し隠せ、である。

そんなアインズの態度を別の意味に捉えたのだろう。シフィーレアが口を挟む。

「大丈夫ですよ。実はこの辺りからカルネ村の近辺まで、『森の賢王』と言われる強大な力を持つ魔獣のテリトリーなんです。ですから滅多なことではモンスターは姿を見せないんですよ」

「森の賢王ですか」

アインズはカルネ村で得た情報を思い出す。

森の賢王とは魔法すら使用する魔獣で、恐ろしいまでの力を持つらしい。森の奥を生活の場としているために目撃情報は皆無に等しいが、存在自体は濫か昔から語り継がれており、一説では数百年の時を生きている蛇の尻尾を持つ白銀の四足獣とのことだ。

「それってオランウータンとかでしょうか」

「ギル君それこの辺りにいるものなの？」

「どうでしょう」

「おらんうーたん？それってどういうモンスターですか？」

「僕らのいたところでは大柄の猿のようなモンスターがそう言われてましたね」

などとギルたちの会話を流し聞きながらアインズは考える。

(会ってみたいものだ。眉睡ではあるが長寿であれば、驚くような知恵を持っているかもしれない。何より森の賢王という名前なのだから。捕えることが出来れば……ナザリックの強化にも繋がるはずだ)

アインズはぼんやりとその魔獣の姿を思い浮かべる。

(森の賢王というと、滅んでしまった動物でそんなのがいたな猿に似た生き物でああ、オランウータンだ。森の人……賢者だったっけ？それに尻尾が蛇……そんなモンスターいたぞ?)

ユグドラシルにもいたはずだと考えたアインズはようやく答えに辿り着く。

(鶴……確か猿の顔、狸の胴体、虎の手足、尾は蛇か……。ユグドラシルのモンスターがいるかは不明だが、天使が召喚されたように、その可能性は十分にあるな)

ユグドラシルの鶴のデータをアインズが思い出していると、ルクルトが再び軽い口調でナーベラルに話しかけていた。

「ま、うんじや、仕事を完璧にしてラブリーナーベちゃんの好感度を上げるとするかね」

ナーベラルの返答は心底嫌そうな舌打ち一つだ。

シヨックを受けた素振りのルクルトを慰めようという人はいない。コンビ芸のように認知されはじめたらしい。

そんなお喋りを交えながら、一行はジリジリと肌を焦がすような太陽光を背負いつつ歩く。革靴には草を踏み潰した際に微かな汁が付着し、青い臭いを放つ。

惨みだした汗を拭う一行を見て、アインズは照りつける日差しも一切苦にならず、重量鎧を着ても疲れを知らないアンデッドの肉体に感謝する。

黙々と歩く仲間達に、ルクルトだけは元気に軽口を続ける。

「みんな、そんなに警戒しなくて大丈夫だって。俺がしっかり見てるからさ。ナーベちゃんなんか俺一を信じてるから超余裕の態度だぜ」
「あなたじゃありません。モモンさんがいるからです」

ナーベラルの眉間に戴が出来る。もう少しすればパンと割れて、何か途轍もないことが起こりそうな予感を覚えたアイنزは、ナーベラルの肩に手を載せると瞬時に表情が和らいだ。そんな二人を見ていたルクルツトはある質問を投げかけた。

「なー。やっぱ、ナーベちゃんもモモンさんは恋人関係なの？」

「こ、っここいびと！何を言うのですか！アルベド様という方が！」

「おま！！」アイنزの絶叫が迸る。「何、言っているんだ！ナーベ！」

「あー！」

ナーベラルが大きく目を見開くと口を押さえ、対して咳払いしつつアイنزが冷たい声を出した。

「ルクルツトさん。詮索は止めていただけませんか？」

「……あー失敬。ちよつとからかうつもりでした。あー、モモンさんにはもう決まった相手がいるんですか」

ペこりと頭を下げたルクルツトはあまり反省している素振りはないが、アイنزはさほど腹は立ってなかった。今回の件に関してはナーベラルがあまりにも愚かだ。

人選を誤ったかと思うが、彼女以外に動かせそうな人材がいなくてにアイنزは内心で頭を抱え異形種で構成されていたアイنز・ウル・ゴウンではメンバーが作ったNPCも殆どが異形種であり、人間の都市に潜り込めるような人材は非常に少ない。ナーベラルは偽りとはいえ数少ない人間の外見を持つ一人だったのだが……性格までは考慮していなかった。

今となってみれば、同じ戦闘メイドの一人であるルプスレギナ・ベータの方が最適だったかもしれないが、いまさら遅すぎる。

自分の失態に青ざめた表情のナーベラルの背を、安心させるようにアイنزは数度軽く叩く。立派な上司は部下の初めての失敗ぐらいは許してやるものだ。繰り返されたときにつんと行けばよい。

それに落ち込まれたり萎縮されたりして、今後の行動に差し支える方が不味い。

何よりアルベドの名前が出ただけだ。記憶操作をする必要性もないだろう。多分。

「ルクルット。もう無駄話はよして、しっかりと警戒してろ」
「了解」

「モモンさん。仲間が申し訳ない。他人の詮索は御法度だというのに」

「いえいえ。今後気をつけていただければ、今回は水に流しますとも」

二人は同時にルクルットの背中に目をやり、「あー、ナーベちゃんに嫌われたよ。うおー好感度完全にマイナスじゃん」

という言葉を聞き肩を落とす。

「あのバカ……あとで強く言っておきます。それと先ほどの話は聞かなかったことになっておきますので」

「それはまあ、うん。よろしくお願いします。それでルクルットさんが警戒しているならばお任せして、私も少しお喋りをさせてもらいますね」

「どうぞどうぞ。ご迷惑をおかけした分、しっかりと働かせますから」

ペテルの笑顔を受けながらアイNZはニヤとダイNに並ぶ。それと交代にダイNが後ろに下がってナーベラルの横につく。

「魔法について幾つか伺いたいです」

ニヤが了解の意を示すのを確認し、アイNZは質問を投げかけた。それに興味を抱いたのか、ンファイレアが眺めてくる。

「魅了、支配などの魔法によって操られた者は、自分の持つ情報をあらかじめ喋ってしまうと思いますが、その対策として特定状況下で複数回質問された場合、その人物が死亡するという類の魔法は存在しますか？」

「そんな魔法は聞いたことがないですね」

アイNZは頭を動かし、ヘルム越しにンファイレアを眺める。

「僕も知らないですね。魔法修正強化で時限式発動っておりますけど、そこまでのことが出来るとは思えないですね」